

万葉集東歌論の一章

——「高麗錦」と「から衣」——

佐佐木 幸綱

1

高麗錦紐解き放けて寝るが上に何と為るとかもあやに愛しき
（巻十四・三四六五）

から衣裾のうち交へあはねども異しき心を吾が思はなくに（巻
十四・三四八二）

から衣裾のうち交ひあはなへば寝なへの故に言痛かりつも
（同上・或本歌）

から衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして
（巻二十・四四〇二）

以上四首の、万葉集東国関係歌中の「高麗錦」「から衣」について考えてみたい。

『万葉考』では、三四六五番歌に頭注を付し、次のように記して

いる。

《高麗錦の紐などといふ哥ことばを以て東にてもよめり。から衣、ありぎぬなどといへる類也》。

以後、現在に至るまでこの理解が継承されて来ている。つまり、枕詞「高麗錦」「から衣」は、都および都周辺を震源地とする《歌ことば》であって、それが東国に流れてゆき《東にても》歌中に詠み込まれるようになった、とするのである。私が調べた範囲では、現在までのところ、この理解を否定する見解は提出されていない。

本稿は、この、真淵以来の理解に対して、いささか異をとなえようとす。『高麗錦』『から衣』は、まず東国歌に詠まれたのではないか。東国を震源地として、都および都周辺の歌にも、《歌ことば》として登場するようになったのではないか。

以上の仮説を提出して、大方の批判をおおごうとするのである。

まず「高麗錦」である。

高麗錦紐解き^きかけて寝る^ねが上^{かみ}に何^など為^なるとかもあやに愛^{かな}しき
(巻十四・三四六五)

「紐を解き放ってお前と寝る、この上どうしろというのか。ただ、やたらに可愛いお前よ」といった意味の、東歌らしい東歌である。「何^など」(巻十四に七例)、「あやに」(巻十四に六例)という東歌の特徴的ボキャブライが登場するのみならず、内容的にも、

上毛野^{かみのの}安蘇^{あそ}の真麻群^{まそぐら}かき抱^だき寝^ねれど飽^あかぬを何^などか吾^あがせむ
(巻十四・三四〇四)

等と共に、性愛場面の表現の大担さにおいて、東歌的東歌、東歌らしさをたつぷりそなえた東歌とみなされるのである。

だが、にもかかわらず、通説ではこれを東歌的東歌とは見ない。「高麗錦」という都の歌からの輸入語を含んでいるからである。

なるほど、数の上からはその通りで、万葉集全体で「高麗錦」の用例は全部で七例、この東歌をのぞけば他はすべて都および都周辺の作中に登場する。

しかし、その用例のいちいちに当たってみると、一対六という数で

割り切っていないわけはゆかないことがわかってくるのである。

六例は、すべて「紐」の枕詞として用いられている。竹取の翁の歌(巻十六・三七九)以外はいずれも恋の歌の中に出、しかも、都の歌にしては露骨な性愛のイメージを持つ作を含んでいる。

垣ほなす人は言へども高麗錦紐解き開けし君にあらなくに(巻十一・二四〇五)

高麗錦紐解き開けて夕だに知らざる命恋ひつつかあらむ(同・二四〇六)

後者は、下紐が自然に解けるのは恋人に逢える前兆とする俗信を下敷きにした歌で、その点を割り引きして考えなければなるまいが、両方とも、かなり露骨なイメージだ、とは言えるであろう。こうした、都近辺の歌にしては露骨な歌が見られるのは、〈歌ことば〉としての「高麗錦」がもともと東国のものであり、「高麗錦——紐」のセットで露骨なイメージを伴いつつ都の歌に吸い上げられて行ったからなのではあるまいか。

高麗錦紐解き^き交^かし天人^{あまびと}の妻問^{つまと}ふ夕ぞわれも偲^{しの}はむ(巻十二・九〇)

七夕の歌である。「高麗錦」は、牽牛と織女とが共寝をする折のイメージにふさわしい、非日常的かつエキゾチックな雰囲気を持

つへ歌ことば〉だったのだろう。高麗という外国産の錦だという、品物としての「高麗錦」の次元でだけではなく、〈歌ことば〉としてそれが、都人には異風を感じさせるものだったのではなかったか。

3

七世紀後半以降、東国には、中国、朝鮮から渡来した人たちが相当数居住しはじめていた。

「持統元年（六八七）三月の乙丑の卯、己卯に、投化ける高麗五十六人を以て、常陸國に居らしむ。田賦ひ稟受ひて、生業に安からしむ。丙戌に、投化ける新羅十四人を以て、下毛野國に居らしむ。田賦ひ稟受ひて、生業に安からしむ。」

『日本書紀』からの引用である。「投化」は、進んで帰化する意だろう。高麗、新羅から投化して来た人たちをそれぞれ常陸、下毛野に送り、農地を与えた、というのである。このような記事が散見するのである。もう少し引用してみよう。

「同年夏四月の甲午の朔、癸卯に、筑紫大宰、投化ける新羅の僧尼及び百姓の男女二十二人を畝る。武蔵國に居らしむ。田賦ひ稟受ひて、生業を安からしむ。」

「持統二年（六八八）五月の戊午の朔乙丑に、百濟の敬須徳那利を以て、甲斐國に移す。」

「持統三年（六八九）夏四月の癸未の朔庚寅に、投化ける新羅人を以て、下毛野に居らしむ。」

「持統四年（六九〇）二月壬申に、帰化ける新羅の韓奈末許満等十二人を以て、武蔵國に居らしむ。」

このようにして、東国各地に分散定住させられたのだが、ここで特に注目されるのは、高麗人である。高麗人の場合、靈龜二年（七一〇）に武蔵國の一ヶ所に移し集められて、高麗郡という郡が新設されるに至るのである。『続日本書紀』に、次のようにある。

「駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野七國の高麗人千七百九十九人を武蔵國へ遷し、始めて高麗郡を置く。」

この七ヶ國および武蔵國は、「東歌」の中心部であり、かつその大半をおおっている。高麗はもと高句麗をさし、後には朝鮮全体の称となるのだが、「東歌」における「高麗錦」の「高麗」はまだ狭義のそれであつたらう。東國各地に送り込まれた彼らが、本國から大切に持って来た錦、あるいは彼らがその技術をもつてして名産な錦を日本で織つたりしたのかもしれない。その錦でつくった紐は、青春期の若者たちのあこがれの品、または青春のシンボルのような品だったのでないか。「高麗錦——紐」が、大胆な恋の歌にきまってる登場する〈歌ことば〉となるには、それなりの理由がなければならぬまい。「高麗錦」はおそらく、こうした背景の中から、まず東國で歌の素材になり、その歌によって〈歌ことば〉として都の方へ波紋を広げていったらう、というのが私の仮説である。

次に、「から衣」はどうか。

「から衣」の用例は、万葉集中に七例、そのうち東国関係歌は二例。東歌、防人歌に例があること、すでに冒頭に引用しておいた。

万葉集歌についてはのちに検討するとして、「から衣」というへ歌ことばが東国のイメージを持っていたらしい微証について記しておこう。

まず、「かきつばた」を折句にした、伊勢物語、古今集に出て来る周知の歌である。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

なぜ、ここで「から衣」なのか。「から衣」が、東下りの道すからの歌だという作歌事情と全く関係がなかったのかどうか。ご存知の通り、通説では、「から衣」は「着」にかかる枕詞であってそれ以上でも以下でもない。「から衣」の「から」は美称としての意味しかない、とするのが通説であった。古今集中の「から衣」の用例は、『国歌大観』によれば十例。業平の掲出歌を除いた九首には、とくに東国を強く意識させる歌はない。ただ、九首中の一首、次の歌は、前後に「東の方へまかりける」折の歌にはさまれて置かれている。「離別歌」で、東国へと出発する男へうたいかけられた歌で

ある可能性が高い。

題しらず

読み人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露の置きてしゆけば消ぬべきものを
(古今・巻八・三七五)

この歌は、ある人司を賜はりて、新しき妻につききて、年経て住みける人をば捨てて、ただ、「明日なむ立つ」とばかり言へりける時に、ともかうも言はで、よみつかはしける

捨てられた古女房から、任官して任地へ旅発つ男へ送られた歌で、「から衣」は、「裁つ」の意で「発つ」と掛けられた「たつ日」にかかる枕詞である。どこへ発つのか、東国へ発つ意が「から衣」に籠められていたのではなかったか。この歌と並んで次の歌がある。

常陸へまかりける時に、藤原公利によみてつかはしける

籠

あさなけに見べききみとし頼まねば思ひたちぬる草枕なり(古今・巻八・三七六)

男の名前「きみとし」と、男の任地「ひたち」とが詠み込まれた物名歌である。このようにさり気なく作歌のモチーフに関わる地名等を読み込む技法が喜ばれた時代の歌である。業平の歌、読み人知

らずの歌の「から衣」も、じつは東国を指示していたのだ、と見ても不思議ではないのではないか。

さらには、源氏物語である。ただでさえ末摘花に辞易している源氏が、末摘花の歌のワン・パターンであることにあきれかえる。

から衣君が心のつらければたもとはかくぞそほちつつのみ

わが身こそうらみられけれから衣君がたもとなれずと思へば

歌というところ「から衣」とくる。源氏はついに、次の歌を末摘花におくつてやる。

から衣またからころもからころもかへすがへすもからころもなる

この末摘花が、東国は常陸の親王（常陸国大守である親王）の娘なのであった。さらに言えば「から衣君が心のつらければ……」の歌は、「みちのくに紙の厚肥えたる」に書かれていた、としてある。

末摘花という女性にしる、恋の歌をおくるに「みちのくに紙の厚肥えたる」を用いたということにしる、平安朝貴族社会から見た東国のイメージの反映と見るべきであろう。とすれば、「から衣」は、

一般に言われるように、枕詞の代表、典型的な枕詞だからここに用いられたのではない。東国のイメージを負って源氏物語に登場している、と見なすべきである。

5

では、東歌中の「から衣」を見よう。

から衣裾のうち交へあはねども異しき心を吾が思はなくに
（巻十四・三四八二）

から衣裾のうち交ひあはなへど寝なへの故に言痛かりつも（同
・或本歌）

「或本歌」とはされているが、後者は前者とは別の作、と見なすべきである。「から衣」の出でくる歌が、東歌には二首あるのだ。

ただ、作中での「から衣」の働きは両首とも同じである。「から衣」は裾のうち交いが合わない、その意で、恋の歌のキー・ワードである「逢ふ」を呼び起こしている。これと同じ用例の「から衣」が都の歌にもあって、「から衣裾の——逢はぬ」の展開を持つ序詞部を形成している。引用しておこう。

朝影にわが身は成りぬから衣裾のあはずて久しくなれば（巻十
一・二六一九）

両者に、とくに差異はない。それなのになぜ、「から衣」なる〈歌ことば〉が、東国のイメージを持つようになったのだろう。

「から衣」は、ふつう、中国風（唐風）の服と解されている。そ

して、上流階級がこれを着用した、と解されている。へ一部の上流社会では大陸ふうの衣服を着ていた。御物の聖徳太子像で見ると、衣は丸襟で、腋の下が割れ、膝丈よりやや長く、庶民の服のようには前で左右を合わせなかった。(小学館『日本古典全集』頭注)。

ここで言われているところが、通説となっている。だが、こう解するのはやや無理なのではないか。唐風の服には、裾のうち交がないのである。聖徳太子像を見ればわかるように、前面はエプロンのように一枚の布が垂らされたかたちになっていて、もともと裾を合わせることはないのである。それなのに、以上三首の用例はいずれも、裾を合わせようとしても合わない、の意に用いられている。ここでの「から衣」は、上流階級が着た中国風の服ではなかったのではないか。

じつは、冒頭に掲げたように、「から衣」は防人歌中にも一回登場している。

から衣裾よこに取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母かなしにして

(巻二十・四四〇一)

この歌の作者他田舎人たが大島には、何らかの事情があつて妻がいなかったようである。ここでの「から衣」(コロムは東国訛言)はどうか。「唐ふうの服。防人としての官服であろう。」(『万葉集全註釈』)と見る説もあるが、資料的裏付けはなく、中国風の服と見るのは無理であろう。

では、どう理解すべきか。「から衣」の「から」は、「唐」でもありうるが「韓」でもありうる。ここは「韓」の意にとり、具体的には、高句麗ふうの衣服と理解するのがよいのではないか。

昭和四十七年、ちょうど高松塚古墳が発見されて大さわぎだった頃、大阪府柏原市の玉手山古墳群の石室で、壁面に線刻された三人の人物画が発見された。人物の高さ二十センチほどの小さなものだったという。「古代研究」第六十三号の、発見者河上邦彦の報告、およびそれを紹介、取材した「朝日新聞」(昭47・4・3)によると、三人は、(1)乗馬姿、(2)武人ふう、(3)貴人ふうで、その顔つき、衣服が、高句麗の古墳の壁画にそっくりなのだそうだ。

線刻画の模写図を見ると、(2)武人ふうはズボンをはいており、(3)貴人ふうは前を合わせる服を着て立っている。私がここで、注目するのは、(3)の貴人ふうである。貴人ふうは、聖徳太子像のような丸襟ではなく、V字型に前で合わせた服を着ている。この貴人ふうの男の服の、前で合わせた裾が、はつきりとずれているのである。稚拙な絵で、細部の描写など一切省かれているが、(2)武人ふうの頭のカプト(らしきもの)等、シンボリックな部分はちゃんと特徴が書かれている。前で合わせた服の裾のずれは、シンボリックな部分だったと認めてよさそうである。

「から衣」は、この、高句麗ふうの服のことではなかったのか。「から衣裾のうち交ひあはなへば……」、「から衣」のシンボリックな部分は、裾の合わせ目が合わない点であった。もし、この線刻画のような服が「から衣」ならば、納得がゆく。

万葉集中で、「から」にかかる枕詞に「言さへく」「さへく」は障るの意で、言葉が障害になる、の意味か、「さひづるや」(言葉の意味がわからず、さえずるように聞こえるの意)がある。「さひづるや」系統で「漢」の枕詞となっている例(住吉の波豆麻の君が馬乗衣さひづらふ漢女をすゑて縫へる衣ぞ)(巻七・二七三)もあるが、「から」は「唐」であると同時に「韓」でもあったはずである。

東国に居住させられた高麗人たちは、先住民の間にすんなりと溶け込めたわけではなかった。点在していた彼らを、武蔵国の一ヶ所に集めたとする霊亀二年の統日本紀の記事は、高麗人と先住民との関係がしっくりといていなかった事情を推測させる。まず、やはり、言葉の壁が大きかったであろう。さらに、宗教、習慣、風俗等、そう簡単に変えられるものではなく、食物にしても服装にしても、日常的なものはおのこと、変えにくかったろうと思われる。

高麗人たちは、日本風の服を着ることを断固拒否して、高麗風の「から衣」で押し通したのではなかった。とくに、東国地方に居住させられた高麗人たちは、数も多かった。また、もしかしたら、中に、有力なリーダーがいたのかもしれない。東国の高麗人は、高麗ふうの風俗を強く保持することで知られていた、と想像することもできるのではないか。

「高麗錦」「から衣」は、再び言うが、どうも東国のイメージを持った語であつたらしい。「東歌」「防人歌」の中にこれらの語が登場するのは単なる偶然ではない、登場すべくして登場していると考える方がよいようである。

注 本稿の論旨は、やがて『万葉集東歌』(日本詩人選)の一章を構成するはずである。なお、末摘花に関しては、酒席の雑談中に、本学の神野藤昭夫助教に示唆されるところがあつたことを付記しておく。